

同業者町の形成に代表される京都らしい都市空間が形づくられると共に、町内会や元学区を単位としたコミュニティが祭などの生活文化を支え、京町家でのくらしに代表される京都の生活文化を伝えてきた。

しかし、新たに建設された中高層のオフィスやマンションなどが京都の町並みの原風景である低層木造建築物が連続する姿に次第に変容させるとともに、伝統産業の低迷による事業所の転廃業等も重なり、職住共存の居住形態や生活様式が変化している。

また、マンション建設等により、地域の居住人口は増加しているが、地域コミュニティは衰退し、新たな地域の担い手が少なくなり、地域内の住民の交流の促進機能、生活文化の維持・継承機能が弱まっている。

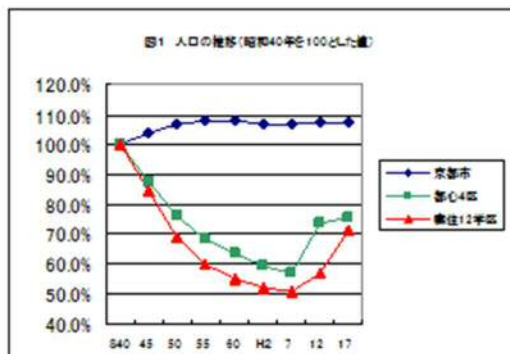


図3-6 人口の推移(昭和40年を100とした値)

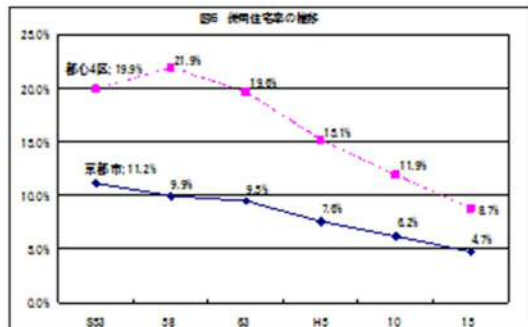


図3-7 併用住宅率の推移

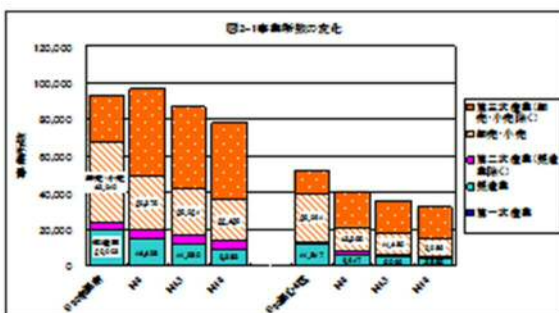


図3-8 事業所数の変化

(4) 歴史的風致をとりまく自然環境の課題

京都の人々は暮らしの中で、周辺の森林と密接な関係を保ちながら、多様な森を守ってきた。その結果、森に蓄えられる水を守り、そして川を守り、人は自然生態系の中でその恩恵を受けてきた。そして、それらの森や川は山紫水明と称される美しい京都の基盤を形成してきた。京都にとって京都盆地周辺の森林は、伝統祭事、伝統工芸品から歴史的建造物に至るまでこれらに不可欠な木材の供給源というだけでなく、美しい景観の重要な構成要素であり、また、書画や詩の題材として、茶道・華道の中心的なテーマとして、さらには、西陣織や京友禅、京焼などの伝統産業のモチーフとして愛され、京都の人々の美意識を育んできた。それが京都の伝統文化、伝統産業に影響を与え、京都の歴史的風致に欠かせない存在になっている。

本来、京都盆地周辺の森林はカシ類などの照葉樹を中心とした森林であったが、平安時代以降、人が、土木・建築用材や燃料用の薪炭、落葉等、様々な形で森林を利用した結果、植生のほとんどない禿げ山も珍しくなかったが、当時の森林は、アカマツ林を主とした遷移の途中段階を保った多様な植生で維持されていた。

しかし、現在、京都の人々の暮らしが森林と密接な関係を持たなくなったため、京都盆地周辺の森林の植生が変化してきている。

外材輸入や建築様式の変化によって、木材価格が低迷し、国内林業は壊滅的打撃を受け、スギやヒノキの人工林は、手入れの行き届かない放置森林となるものが増えている。そして、化石燃料の普及によって、人は薪炭等の燃料を森林に求めることがなくなり、石油製品の普及によって、様々な形で利用されてきた多種多様の樹木を森林に求めることがなくなっている。結果として、マツ枯れや植生遷移によって、シイ・カシ類などの常緑樹が優先する森林が拡大している。そこでは、林内の光環境の悪化による生物多様性の後退や、景観的には四季の彩りを感じさせることが少なくなるなど、森林が持つ多面的機能が減退している。また、マツ枯れやナラ枯れの発生、シカの食害による森林植生への影響や景観への影響が顕著に現れるなど、様々な問題が露呈してきている。例えば、伝統行事への影響として「京都五山送り火」の護摩木として欠くことのできないアカマツもマツ枯れにより不足していることがあげられる。